

山梨県北巨摩郡大泉村

大和田第3遺跡

OHWADA NO.3 SITE

県営闇場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

1990・3

大泉村教育委員会
峡北土地改良事務所

山梨県北巨摩郡大泉村

大和田第3遺跡

OHWADA NO.3 SITE

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

1990・3

大泉村教育委員会
峡北土地改良事務所

序 文

平成元年度の県営圃場整備事業に伴い、大和田第3遺跡の発掘調査が実施されました。この遺跡は事業に先立って行われた試掘調査で明らかとなった遺跡です。

村内の県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は既に10年を越す歳月の中で国の史跡に指定された金生遺跡をはじめ、寺所、天神、城下、東原、姥神等の遺跡で実施され、特に顕著な成果を挙げております。

今回調査された大和田第3遺跡は縄文時代中期後葉の遺物の包蔵地で、私たちの祖先の生活の痕跡を直接的に裏付ける住居址や墓壙は見つかりませんでしたが、人々が残したその土器、石器の存在から広い意味で当時の人々の生活の舞台となった場所であることがわかりました。ここを生活の舞台とした人々はどういう生活をしていたのでしょうか。同時代の遺跡である姥神、方城第1、大和田、大和田第2といった諸遺跡とはどういう関係にあったのでしょうか。尽きぬ興味があります。ここに上梓される運びとなったこの調査報告書が村民の方々に広く活用されることを望むと共に、考古学、郷土研究の参考に供していただければ幸いと思います。

最後に調査及び整理に関わった皆様、関係諸機関の皆様に対して厚く御礼を申し上げます。

平成2年3月

大泉村教育委員会

教育長 斎 藤 斎

例　　言

- 1 本書は平成元年度県営圃場整備事業に伴う大和田第3遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は岐北土地改良事務所との負担協定により、文化庁、山梨県より補助金を受けて大泉村教育委員会が実施した。
- 3 大和田第3遺跡は大泉村谷戸4702番地他に所在する。
- 4 発掘調査期間　平成元年7月12日～平成元年9月4日
整理作業期間　平成元年10月24日～平成2年3月31日
- 5 調査対象面積　8,200m²
調査実施面積　2,510m²
- 6 調査事務局　大泉村教育委員会
　　浅川義彦（教育長～5月15日） 斎藤 章（教育長 5月25日～） 浅川哲男（課長～5月15日） 藤森龍夫（課長 5月16日～） 藤原 昭（係長～5月15日） 藤原 宝（係長 5月16日～） 斎藤正一 原かつみ
　　調査担当 伊藤公明
- 7 発掘調査・整理作業参加者（敬称略、五十音順）
　　相吉よしえ 浅川久代 浅川達子 浅川日出子 浦志真孝 進藤きく枝 中山知恵 広瀬千江美 藤森房子 細田紹代 三井禮子 三井種子 三井光恵 渡辺とりの
- 8 本書の執筆は石器については浦志が、他は伊藤が執筆した。また、付録大和田第3遺跡出土繩文土器の胎土分析については帝京大学山梨文化財研究所の河西学氏に原稿を執筆していただいた。
- 9 発掘調査及び本書の作成にあたって次の諸氏に御助言、御教示を賜わった。記して謝意を表したい。（敬称略 五十音順）
　　雨宮正樹 柳原功一 小菅将大 新津 健 米田明訓
- 10 本調査の出土品、諸記録は大泉村歴史民俗資料館に保管してある。
- 11 本調査にあたり、山梨県教育庁文化課、岐北土地改良事務所、村土地改良区、地権者の皆様に御助言、御協力をいただいた。記して謝意を表したい。

目 次

序 文	i
例 言	ii
目 次	iii
I 調査に至る経緯と経過	1
II 遺跡の位置と環境	1
III 調査の方法	6
IV 層 序	6
V 発見された遺構と遺物	7
1 小土壙	7
2 包含層	7
3 遺 物	7
(1) 繩文上器	7
(2) 石 器	13
VI 成果と課題	17
引用・参考文献	17
付録 大和田第3遺跡出土縄文土器の胎土分析	19
図 版	

I 調査に至る経緯と経過

平成元年度の県営圃場整備事業の対象として、村内では大和田工区約16万m²の開発が予定された。この地域内では周知の遺跡は存在しないが、この周辺には昭和63年度に発掘調査を実施した大和田遺跡、大和田第2遺跡をはじめ西屋敷遺跡、泉下遺跡といった周知の遺跡があり、未確認の遺跡の存在する可能性があった。また、現土地利用を見るとほとんどが水田であって遺跡の所在を表面観察だけでは確認しにくい状況となっていた。そこで村教育委員会では昭和63年11月21日～12月6日にかけて対象となる地域をほぼ網羅するように試掘調査を行い遺跡の所在の確認に努めた。その結果、谷戸4702番地を中心とする地域で量は多くなかったが遺物（縄文土器、石器、陶磁器等）を包蔵することを確認した。遺構は確認できなかったが該期の集落の埋没している可能性があると判断し、文化庁長官宛に昭和63年12月26日付け大教委第12～39号文書で大和田第3遺跡として遺跡発見の通知を提出した。この結果より山梨県教育庁文化課、峠北土地改良事務所、村教育委員会が協議し、この地域の発掘調査を実施することとなった。調査対象面積は8,200m²で、調査には大泉村教育委員会があたることとなった。

その後、昭和64年1月5日付け人教委第12～23号文書で昭和64年度文化財補助事業計画書を提出、平成元年5月16日付けで補助金交付内定を受ける。同5月25日補助金交付申請書を提出した。また平成元年6月5日付けで峠北土地改良事務所から文化財保護法第57条の3第1項の規定により発掘通知が提出され、同6月21日付け教文第6-98号文書で周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）を受理した。また、平成元年5月10日付けで峠北土地改良事務所と人泉村との間で県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の負担協定を取り交わし、同7月6日に埋蔵文化財発掘調査実施計画書を峠北土地改良事務所へ提出した。

発掘調査は平成元年7月12日に着手し、9月4日に終了した。また、同9月6日付けで長坂警察署長宛に埋蔵物発見届けを提出すると共に同日付けで山梨県教育長宛に埋蔵文化財保管証を提出した。整理作業は10月24日から着手し、平成2年3月31日全ての作業が終了した。

II 遺跡の位置と環境

大泉村は山梨県の北限に位置し、八ヶ岳の南麓大地のほぼ中央に位置している。この八ヶ岳はフォッサマグナ中部にあり、長野、山梨両県にまたがる南北約21kmにもわたり2,000m級の火山が群をなす複式火山である。これらは天狗岳を境にその活動様式と岩質によって以北を北八ヶ岳火山群、以南を南八ヶ岳火山群とに二分される。また、この西南麓～東麓にかけては中期～後期更新世初頭にかけての疊層で形成された火山麓扇状地が展開している。



- 1 大和田第3遺跡 2 大和田遺跡 3 大和田第2遺跡 4 方城第1遺跡 5 神神遺跡 6 東姥神遺跡
 7 天神遺跡 8 山崎第4遺跡 9 郡所遺跡 10 豆生田第3遺跡 11 金生遺跡 12 甲ヶ原遺跡 13 石堂B遺跡
 14 石堂A遺跡 15 野添遺跡 16 西原遺跡 17 青木遺跡 18 湯沢遺跡 19 郡所前遺跡 20 川又南遺跡 21 柴
 岩堂遺跡 22 清水端遺跡 23 須無遺跡 24 長板上条遺跡 25 柳坪遺跡 26 別当遺跡 27 大八田原田遺跡
 28 転屋敷遺跡 29 上平出遺跡 30 中原遺跡 31 沢の田遺跡 32 岩久保遺跡 33 根古屋遺跡 34 真原遺跡
 35 向原遺跡

第1図 周辺の地形と遺跡の分布 ($S = 1/1000000$)



- 36 東原遺跡 37 谷戸城址 38 城下遺跡 39 前林山十三塚 40 寺所遺跡 41 木ノ下・大坪遺跡 42 原田遺跡
43 別当十三塚遺跡 44 小和田館跡 45 当町遺跡

第2図 遺跡位置図 (S=1/25000)

ここで山梨県側の地形を見ていくと、この八ヶ岳南麓の東西には「七里ヶ岩」と呼ばれる圭崎岩肩流の比高100mに及ぶ急崖が形成され、これに沿って東側を塩川及びその支流の須利川、西側を釜無川が流れ、この峠北地域の地形、地質を大きく三分している。

次に村内の地形を概観すると標高1,000～1,200mを境に、以上の八ヶ岳山体部とそれ以下に展開する山麓緩斜面部とに大きく二分出来る。後者は前述の圭崎岩肩流と共に生じた流れ山が点在している。また、微視的に見るとこの山麓緩斜面部は標高1,000～1,500mに位置する多数の湧水によって開拓された南北に細長い痩せ尾根が連続しており、これらの尾根上や前述の流れ山に多数の遺跡が展開しているのである。今回調査を実施した大和田第3遺跡は痩せ尾根を中心に谷部にかけて形成された包蔵地である。

以下歴史的環境について時代を追って概観していく。

先土器時代の遺跡は村内ではまだ確認されていないが、高根町の丘の公闇14番ホール遺跡、湯沢遺跡等、数は少ないながら当地域にも存在している。村内でも今後発見される可能性が十分あり、注意して確認に努めている。

縄文時代になると村内の遺跡数は飛躍的に増加する。第1図は当地域で発掘調査された縄文時代の遺跡の主なものが提示してある。発掘調査件数の多寡にも左右されるが八ヶ岳南麓台地については標高600～900mにかけての緩斜面部に集中する傾向が観取される。また、時期別に見ていくと八ヶ岳山麓全域に共通することであるが特に中期に遺跡数はピークに達する。以下時期毎に概観する。

創草期の遺跡は村内ではまだ確認されていない。しかし、昭和7年に北巨摩郡教育会郷土研究部により刊行された「先史原史時代調査」の中に村内発見の石槍として記載のある遺物が、この時期の特徴的な遺物である有舌尖頭器らしいことが指摘されている。残念なことに詳細な出土地等については不明である。

早期の遺跡は村内で現在6遺跡が知られている。発掘調査された遺跡は谷戸城址と山崎第4遺跡（未報告）だけである。いずれも遺構は検出されていない。

前期になると村内の遺跡数は26と急激に増加している。これらは拠点的な大規模集落として著名な天神遺跡、やや小規模と考えられる御所遺跡、更に小規模な寺所遺跡など、集落の多様なあり方が発掘調査で明らかとなっている。

中期の村内の遺跡は45遺跡あり遺跡数は最大となる。内発掘調査された遺跡は11遺跡に上りその内容は多様なものがある。後葉の曾利期の集落について見ると拠点的な大規模集落となる姥神遺跡、拠点的性格ではあるが小規模な方城第1遺跡、小規模で単一時期に環状集落を形成する大和田遺跡、広範囲に調査はされたが住居址1～数軒しか確認されなかった寺所遺跡、金生遺跡等がある。これらの集落の特徴は生産形態と集落の立地を考える上で極めて重要な示唆を我々に提供している。

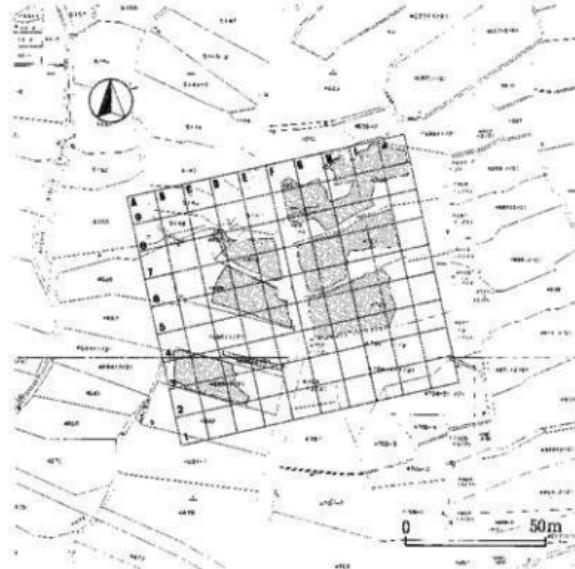
後期になると村内の遺跡は22遺跡と減少に転じる。中でも後期前半期に集中し、後半期では

僅かに金生遺跡が知られるのみである。しかし、注目を要するのは大規模な室外配石を展開する集落群のあり方である。八ヶ岳南麓台地を見ると後期前半の純神遺跡に明らかにその出現を見、青木遺跡では整然と石棺墓群が展開している。更に石室遺跡、晩期前半に至って金生遺跡の人配石を見るようになるのである。これらの遺跡は互いに時期的にオーバーラップしながら存在し、その交流や変遷の様子が想像される。また、この地域の該期の特徴的な住居形態として方形プランの住居の壁に石を巡らすものがあるが、この形態も後期前半に出現を見、晩期終末期まで変遷が辿れる。

晩期の遺跡については金生遺跡について上述したが、それ以外に2遺跡確認されているのみである。しかし、後期以降遺跡の立地が低位部に移行していることから今後水田下等から発見される可能性が十分考えられる。

弥生時代以後古墳時代まで大泉村ではほとんど遺跡がなくなる。また奈良時代においては大泉だけでなく八ヶ岳南麓台地全域を見ても遺跡の所在は全く確認されていない。

平安時代になると9世紀後半に村内の遺跡数は急激に増加する。発掘調査されたものとして城下遺跡、原田遺跡、東原遺跡、木ノド・大坪遺跡、東姥神遺跡、豆生田第3遺跡等がある。この中で中心的な集落と考えられているのが城下遺跡である。この遺跡からは灰釉陶器、縁釉陶器の他石器、皇朝十二錢の一つである貞觀永宝が1点出土している。また、東原遺跡、東姥



神遺跡からは鍛冶工房址が検出されており、当時の農村の風景を彷彿させる。これらの平安時代の各集落は官牧の一つである柏前牧や免見郷の設置及びこれらに伴う開発と関連したものと考えられる。

中世の遺跡は現在村内で39遺跡が確認されている。この中には免見清光の居城と伝えられる谷戸城がある。またこの城に関連した地名として町屋、対屋敷、御所等が残されている。

第3図 グリッド配置図 (S = 1/2000)

III 調査の方法

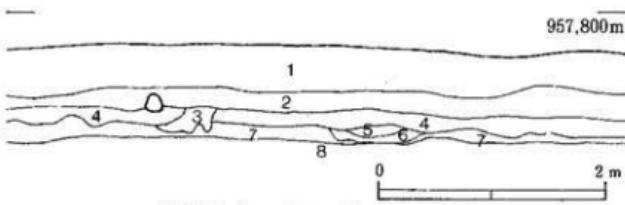
調査地点の選定は試掘調査により明確となった遺跡の範囲の内、土地改良事務所から提示された圃場整備地区内の切り盛り図を基に、地表面から50cm以上盛土する箇所以外をその対象として行われた。また、道路部分については地形の観察から遺構の残存する可能性が低いと判断される上、時間的な制約からも調査の対象から除外した。

調査の方法は重機による表土除去後、任意の一点に基準杭を設定し、現土地利用状況に合致したグリッドラインを設定した。この角度はN 12° Wである。このグリッドラインを南側から北側へ10m間隔に1～9、西側から東へA～Jと呼称し調査を進めた。これと併行して除築等により遺構の精査確認し各遺構の調査を進める方法を探った。また測量は10mグリッド杭を基準点とし、平板で1/20縮尺の遺構断面を作成し、全調査は同様の方法によって1/100縮尺の図を作成した。

IV 層序

今回の調査区は地形的に尾根部と谷部に大別できる。谷部については包含層との関わりから後述するが、尾根部については表土流出が極めて顕著で、また田普請等擾乱も顕著なことから唯一プライマリーな堆積を示した調査区南西部の層序について解説する。

- 1層 表土耕作上層。暗褐色を呈する。炭化物粒子少量を含む。
- 2層 田普請時の客土層である。炭化物粒子、ロームブロックを含む。暗黄褐色を呈する。
- 3層 暗褐色を呈する。擾乱層である。
- 4層 黒褐色を呈する。炭化物粒子を少量含む他、直径10mm前後の小石を含む。
- 5層 暗黄褐色を呈する。炭化物粒子を含むローム質上層。遺構覆土か。
- 6層 黒褐色を呈する。炭化物粒子を少量含む。ローム粒子多含。遺構覆土か。
- 7層 ソフトローム層。黄褐色を呈する。
- 8層 ハードローム層。黄褐色を呈する。



第4図 土層図 (S = 1/50)

V 発見された遺構と遺物

大和出第3遺跡から発見された遺物は縄文土器（中期前葉～中期末葉）、石器（石鏃、楔形石器、打製石斧、磨石）、黒曜石石核、同原石、近世陶磁器片、古錢（寛永通宝）等である。その総量は整理箱に1箱程のものである。これらの内、縄文土器、石器についてはほとんどが遺跡の東半の稀薄な包含層中からの出土で後述する遺構から伴出したものは皆無であった。

また、この遺跡から検出された遺構は小土壙が12基、風倒木痕が1穴である。その他、調査区東半に稀薄な包含層が形成されている。以下記述を進める。

1. 小土壙（第6図）

調査区南西のA・B-2・3区、1号トレンチ中と、北半のD・E-6・7区から検出されている。この内、D・E-6・7区から検出された24基の小土壙は覆土中から割り石が多く検出されており、畑の耕作にあたって邪魔な石を抜き取った穴、もしくは割り入れた穴と思われる。これらの年代は伝承によれば近世を遡るものではない。

A・B-2・3区から検出された小土壙の覆土は均質で、粘性の弱い炭化物粒子を少量含んだ黒色土である。先述のとおり遺物の検出されたものはない。形態、規模については全く齊一性がみられない。

2. 包含層（第7図）

包含層は調査区の東半に形成され、北東部から南北方向へ広がっている。遺物の包含が稀薄なことと時間的な制約からトレンチを設定し、その土層の堆積の観察と遺物の取り上げに的を絞って調査を進めた。

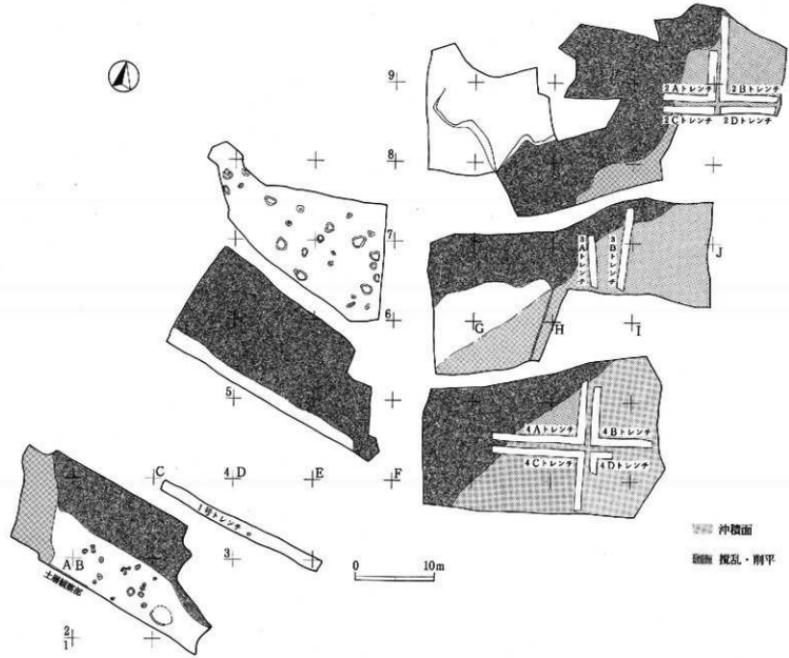
現土地利用が水田であるため、地盤の切り盛りが顕著で包含層の上部の堆積は明らかに出来なかつたが、概ねの土層の堆積を見ると上位に黒色土の堆積が見られる。これは炭化物粒子を少量含んだ、粘性の弱いものである。この黒色土層が遺物の包含層である。また、この土層は中央に行くほど層厚が厚く、包含する礫、石も巨大なものを含むようになる。下位には確認できなかつた場所があるが、粘性の強い褐色土層が堆積している。底面は地山の小礫を含んだソフトローム層である。

遺物の出土状況は石と石の間から出土したものが多く、いわゆる層中分布を示している。

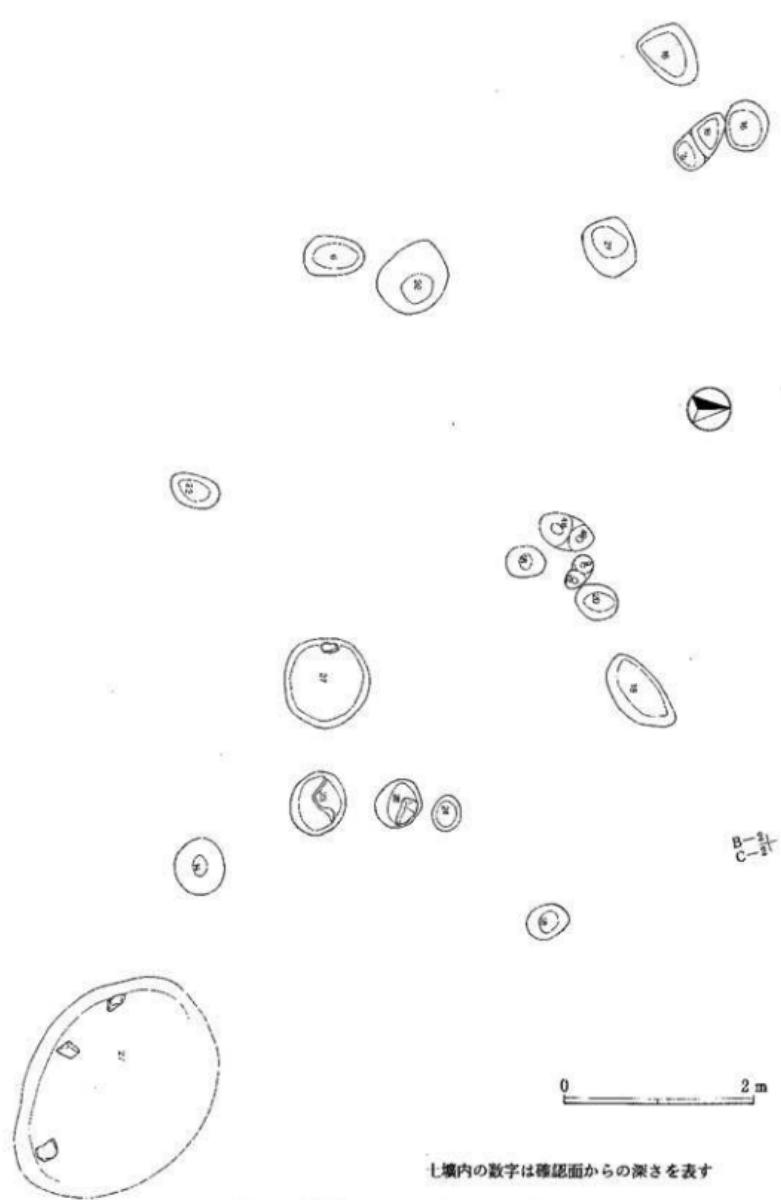
3. 遺物

(1) 縄文土器（第8・9図）

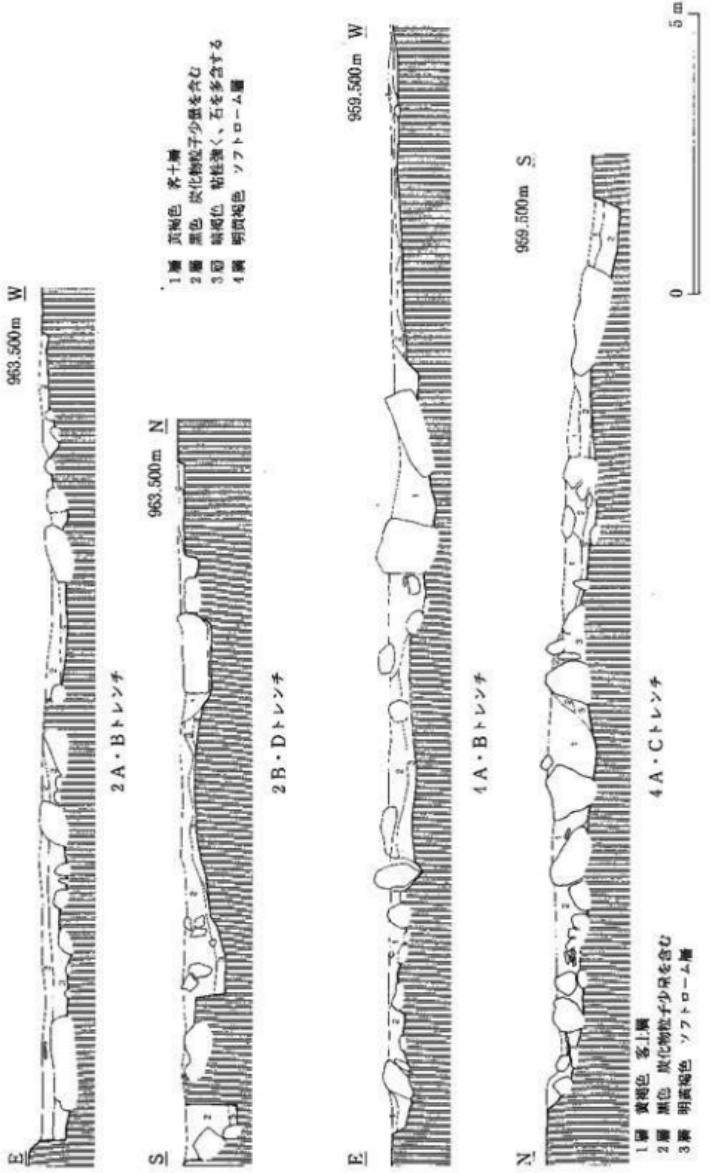
先述のとおり、遺物は少なく、図示し得るものは全て提示した。以下記述を進める。



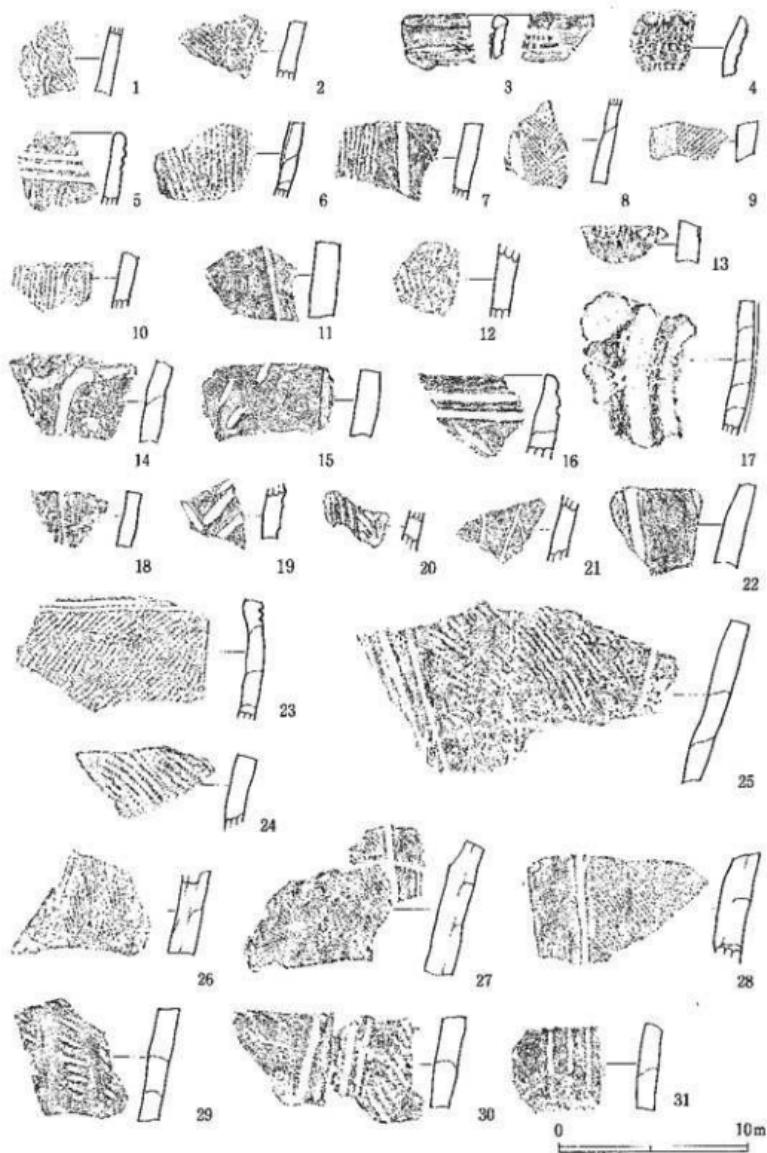
第5図 大和田第3遺跡全測図 ($S = 1/500$)



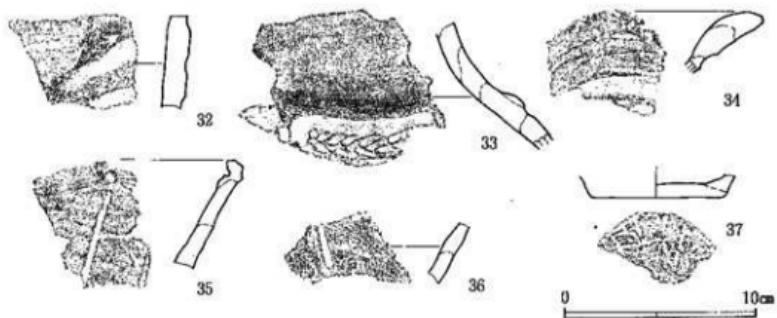
第6図 土 壌 平 面 図 ($S = 1/60$)



第7図 谷部土壤断面図 ($S = 1/100$)



第8図 出土土器(1) (S=1/3)



第9図 出土土器(2) ($S = 1/3$)

第8図1~4は縄文時代中期前葉に位置付けられる。1、2は五領ヶ台式に比定されるもので共に胎土中に金雲母が多量に含まれる。単節RL施文後継位のS字結節文が施文される。

第8図5~9図34は縄文時代中期後葉に位置付けられる。

5~10は地文に条線の施文されるものである。これらの内、9は隆帯の剥落したものである。11~13は押し引き文を地文とするものである。11には懸垂文区割と思われる縦区割が見られる。14は刺突文を地文とするものであり、15は列点文を地文とするものである。16~18~21はハの字文を施文するものである。この内、21はヘラ描き状にハの字文が施文されている。

23~31は縄文を地文とするものである。23は胸部上半の破片で、頸部に沈線が巡る。また胸部は単節LR施文後に懸垂文状の区割が施文されている。器形はキャリバー形を呈する。25は人型の深鉢の破片である。3本以上の沈線で区割された中に単節RLが充填されている。26~28は同一個体の破片で、やはり大型の深鉢の破片である。沈線施文後に単節RLが充填されている。また、これらの破片の断面観察から、輪積み成形後に上器内面に粘土を1~2回貼り付けて補強していることが窺える。30~31は同一個体の破片である。4本の沈線で区割された中に単節RLが充填されている。32はその剥落痕からX字状ないし橋状把手付の大型深鉢の破片と考えられる。33は鉢形土器の破片である。肩部の沈線区割の中に横方向にハの字文が充填されている。

35~37は同一個体の破片である。底部には木葉痕が明瞭に観察される。縄文後期前葉の所産であろうか。

(2) 石器 (第10~11図)

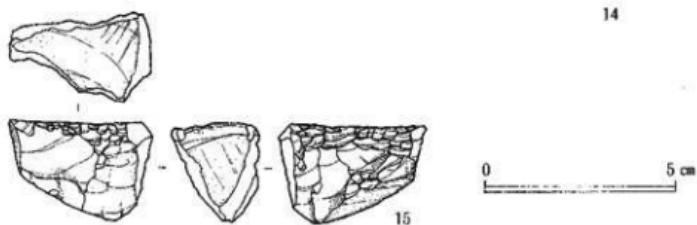
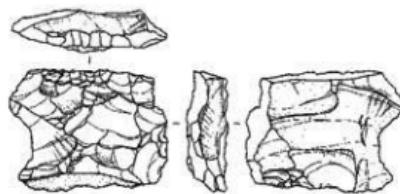
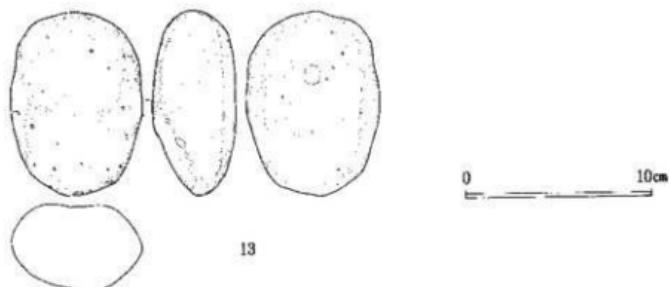
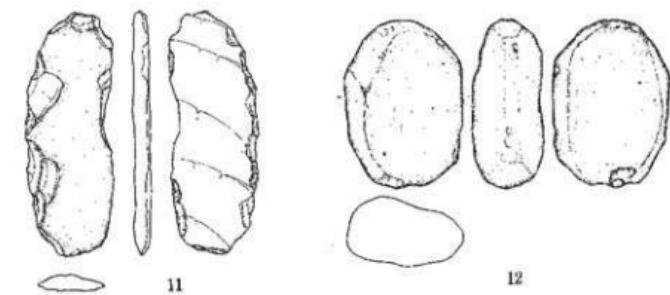
本遺跡から検出された石器は、石鏃3点、楔形石器7点、打製石斧1点、磨石2点、剥片35点、石核2点、原石3点、総数52点と少ない。石材別に見ると、黒曜石が多く、次いで安山岩、その他となっている。器種別に見ると、楔形石器が多く、これに次いで石鏃、磨石と続く。

石鏃 (第10図1~3)

1は基部の抉りを明瞭に作り出し、直線的な側縁をもつもので、全面にわたり丁寧な調整剥離を施している。裏面には素材面と考えられる剥離面を残している。先端部欠損。2はやや脚



第10図 出土石器(1) (S=2/3)



第11図 出土土器(2) (11~13は $\frac{1}{3}$ 、14、15は $\frac{2}{3}$)

No	器種	最大長cm	最大幅cm	厚さcm	重量	石質	備考
1	石 鐵	2.2	1.5	0.3	0.5	黒曜石	
2	石 鐵	1.4	1.6	0.5	0.6	黒曜石	
3	石 鐵	1.8	1.0	0.4	0.5	黒曜石	
4	楔形石器	2.9	3.1	1.6	10.1	黒曜石	
5	楔形石器	1.6	1.7	0.9	3.7	黒曜石	
6	楔形石器	2.6	1.5	0.8	1.8	黒曜石	
7	楔形石器	2.4	1.6	0.8	2.3	黒曜石	
8	楔形石器	2.1	1.1	0.8	1.3	黒曜石	
9	楔形石器	2.2	1.3	0.8	1.9	黒曜石	
10	楔形石器	1.5	1.1	0.4	0.4	黒曜石	
11	打製石斧	13.2	4.8	1.0	89.0	不明	
12	磨 石	9.2	7.4	3.9	266.0	安山岩	
13	磨 石	10.0	7.1	4.7	493.0	安山岩	
14	石 核	3.2	4.2	1.1	14.9	黒曜石	
15	石 核	2.2	3.8	2.3	19.0	黒曜石	

表1 出土石器観察表

部の幅が広く、若干曲線的にふくらむ側縁をもち、全面にわたり調整加工を施している。先端部欠損。3は木製品と考えられる。右側縁には調整加工を施している。左側縁に最も新しい折断面が見られ、これによって製作を放棄したものと思われる。なお、1～3は、いずれも黒曜石製である。

楔形石器（第10図4～10）

7点検出され、石材は全て黒曜石製である。いずれも上下両端に細かな潰れが見られ、4・5は特に顕著である。その形状はほぼ四辺形、または紡錘形を呈する。4は他のものに比べて大きく、素材の形状をとどめている。

打製石斧（第11図11）

縦長の剥片を素材とする。側縁部にはあまり調整加工を施さず、刃部は原石面を残す剥片の縁辺部をそのまま利用している。

磨石（第11図12・13）

12・13とも長円形の自然縫をそのまま利用しているもので、12は右側縁と裏面に、13はほぼ全面に磨耗痕が見られる。安山岩製。

石核（第11図14・15）

14・15とも打面は平坦な原石面からなり、打面調整は行われていない。14は作業面は正面と裏面、左側面に設けられている。特に正面からの剥片を多く剥離している。15は正面と裏面に作業面が設けられ、裏面は細かな調整剥離が施されている。黒曜石製。

VI 成果と課題

今回の調査では稀薄な包含層の存在を明らかにできたのみであったが、この近隣に縄文時代中期末葉の集落が存在したことは今回の調査や大和田第2遺跡の存在から十分想定できる。

ここ数年の県営圃場整備事業に伴う発掘調査の成果によって姥神遺跡、方城第1遺跡、大和田遺跡等、諸遺跡から該期の集落が検出され、その分布がある程度明らかになってきている。これらは痩せ尾根の南端部の斜面を中心に展開しており、また、空間的には500m前後の間隔をもって位置している。その性格については多様な様相が見られ、単純な意味での同時存在を考えるのは危険ではあるが、縄文時代中期終末に向けて遺跡の膨張、拡散の見られる時期にあって500m間隔という極く狭い領域をもって一時にせよ集落間の均衡が保たれていたということができる。このことから大和田第2、人和田第3遺跡で明らかにできなかった集落址の存在も空間的には存在しうることになる。また、圃場整備事業対象地を網羅するように実施した試掘調査から、遺物の分布を見ると大和田第2、大和田第3遺跡の近隣にしか集落の存在を想定できない。むしろ両遺跡の包含層の状況や、各水田、畠地に残る転石の状況から土石流等の天災によりその痕跡を停めないまで破壊されたのではないかと考えられる。

集落の埋没していることを想定しての今回の調査であったが、残念ながら頭書のとおり集落の存在は明らかにできず、集落が存在したという結論が得られたのみであった。しかし、天災等で壊滅した集落（実際に近世以降、集落が壊滅した例もある）をどの様に位置づけていくか、今後集落論を展開していく上で考慮していかなければならない。

引用・参考文献

- 雨宮正樹 1988 「西原遺跡・当町遺跡」高根町教育委員会 島北土地改良事務所
伊藤公明 1988 「方城第1遺跡」大泉村教育委員会 島北土地改良事務所
伊藤公明 1989 「人和田・大和田第2遺跡」大泉村教育委員会 島北土地改良事務所
岡村道雄 1983 「楔形石器・ビエヌエスキュー」『縄文化の研究7 道具と技術』雄山閣
河西 学他 1989 「八ヶ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末土器群の胎土分析」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第1集
柳原功一 1985 「東姥神B遺跡」大泉村教育委員会 島北土地改良事務所
柳原功一 1986 「豆生田第3遺跡」大泉村教育委員会 島北土地改良事務所
柳原功一 1987 「姥神遺跡」大泉村教育委員会 島北土地改良事務所
小林広和他 1986 「第1章二 真原遺跡の発掘調査」『武川村誌』武川村
小林広和 1987 「縄文時代の土壤について」『研究紀要4』山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財セ

ンター

- 小林広和 1989 「考古編」「武川村誌 資料編」武川村
佐野勝広 1983 「木ノ下・大坪遺跡」大泉村教育委員会
佐野勝広 1984 「東姥神遺跡」大泉村教育委員会
佐野勝広 1984 「沢の田遺跡」小瀬沢町教育委員会
末木 健 1983 「第1章 原始・古代」「小瀬沢町誌」小瀬沢町
末木 健他 1975 「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査—北巨摩郡長坂、明野、韮崎地内」山梨県教育委員会 日本道路公团東京第二建設局
田代 孝 1987 「御蔵地遺跡」山梨県教育委員会 山梨県土木部
中村由克也 1988 「八ヶ岳山麓の旧石器時代遺跡」「八ヶ岳山麓の第4系」地団研専報34
新津 健他 1980 「山梨県金生遺跡」「日本考古学年報」33
新津 健他 1987 「寺所遺跡」山梨県教育委員会
新津 健 1989 「第二編第一章第五節 遺跡から見た村の歴史」「大泉村誌」大泉村
平野 修 1985 「根古屋遺跡」白州町教育委員会 畠北土地改良事務所
武藤雄六他 1978 「曾利」富士見町教育委員会
八巻与志夫 1988 「金生遺跡I(中世編)」山梨県教育委員会
山梨大学考古学研究室 1978 「御所遺跡発掘調査報告」
山梨大学考古学研究室 1981 「御所遺跡—第2次発掘調査報告書」
米田明訓他 1986 「柳坪遺跡」山梨県教育委員会 日本道路公團

1. はじめに 大和田第3遺跡は、南八ヶ岳の三ツ頭に水源を発する宮川と泉川とに挟まれた火山麓扇状地面に位置する。現在両河川はこの扇状地を下流で運んでいる。両河川の上流域には三ツ頭から噴出した三つの溶岩が厚く分布している。三ツ頭溶岩は、紫蘇輝石カンラン石普通輝石安山岩および普通輝石カンラン石玄武岩からなる多量の溶岩と、火山角礫岩・降下スコリア・スコリア流堆積物などから構成されている（河内、1977）。また泉原・八ヶ岳泉郷の位置している八ヶ岳火山体斜面下部には、大和田第3遺跡の扇状地よりも古い火山麓扇状地が分布している。すでに八ヶ岳南麓地域の總神遺跡・頭無遺跡での分析から、八ヶ岳山麓河川砂と類似性の高い組成をもつ土器に混じって、八ヶ岳山麓には産しない岩石組成を示し搬入品と推定される土器が混在していることが明らかになっている（河西ほか、1989）。ここでは、大和田第3遺跡出土土器を中心に、近接する大和田遺跡・方城第1遺跡の土器を比較資料として岩石学的手法で分析を行ない、縄文遺跡の性格を考える一側面からの資料としたい。

2. 試料 分析試料は、大和田第3遺跡5点、大和田遺跡12点、方城第1遺跡3点、合計20点の縄文時代中期末の土器である。試料表を第1表に示す。実測図・拓影を第1図に示す。なお、No.7は唐草文系およびNo.16は加賀利式でありそれぞれ搬入土器と考えられている。

3. 分析法 考古学的記載の終了した土器試料は、切断機で3×2.5cm程度の大きさに切断し、残りの試料は保存した。脆弱な試料はエボキシ樹脂を含浸させて補強し、岩石薄片と同じ要領で土器の器壁に平行する薄片を作製した。さらにフッ化水素酸蒸気でエッチングし、コバルチウム硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色し、次の方法で岩石鉱物成分のモード分析を行なった。偏光顕微鏡下において、

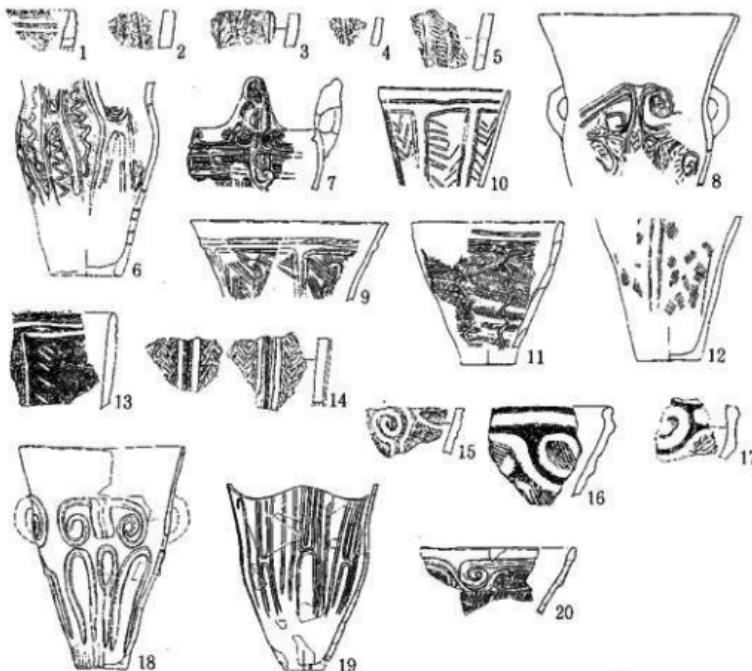
第1表 試料表

オートマチックポイントカウンタを用い各薄片で2,000ポイントを計測した。ステージの移動ピッチはプレパラートの長辺方向に0.33mm、短辺方向に0.40mmである。計数対象は、粒径0.05mm以上の岩石鉱物粒子、およびこれより細粒のマトリックス（“胎土”）部分とする。植物珪酸体はすべてマトリックスに含まれた。

顕微鏡下で以下の岩石鉱物を区別した。石英（單一結晶・多結晶）・カリ長石・斜長石・重鉱物・玄武岩・安山岩・デイサイト・変質火山岩類（凝灰岩を含む）・花崗岩類・ホルンフェルス・変成岩類・砂岩・泥岩（頁岩・

試料番号	遺跡	地点	参考	土器分析
1	大和田第3遺跡	本報告	84E-16	青利式
2	〃	〃	84E-11	〃
3	〃	〃	84E-15	〃
4	〃	〃	84E-18	〃
5	〃	〃	84E-20	〃
6	大和田遺跡	6号住	報告書 ¹	19E-1
7	〃	〃	19E-4	唐草文系
8	〃	7号住	21E-1	青利式
9	〃	〃	21E-3	〃
10	〃	〃	21E-4	〃
11	〃	〃	21E-5	〃
12	〃	〃	21E-7	〃
13	〃	〃	22E-10	〃
14	〃	〃	22E-19	〃
15	〃	〃	22E-21	〃
16	〃	谷戸山土	34E-51	加賀利式
17	〃	〃	42E-3	〃
18	方城第1遺跡	1号配石	報告書 ²	34E-1
19	〃	〃	34E-2	〃
20	〃	〃	34E-3	加賀利式

¹ 「大和田遺跡・大和田第2遺跡」、² 「方城第1遺跡」



第1図 試料実測図（縮尺不同）

粘板岩を含む)・珪質岩・炭酸塩岩・火山ガラス・変質鉱物・その他である。重鉱物は、黒雲母・角閃石・酸化角閃石・單斜輝石・斜方輝石・カンラン石・緑簾石・褐簾石・ジルコン・ザクロ石・電気石・スフェーン・不透明鉱物が検出された。これらの岩石鉱物以外に鏡下で赤～褐色を呈する粒子が存在する。この赤褐色粒子は、内部が土器のマトリックスと極めて類似性の高い組織を持つものと、褐鐵鉱様粒子との2種類が認められるが、ここでは一括して扱う。

4. 土器の岩石鉱物組成 分析結果を第2表に示す。これをもとに試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリックスの構成を示した全体構成図、および砂粒子の岩石鉱物組成図・重鉱物組成図などを第2図に示す。なお重鉱物組成図では右側に基数を表示した。

(1)大和田第3遺跡 全体構成からみると砂粒子の含有量は、14～20%であり他の2遺跡と比較すると若干少ない。赤褐色粒子は約1%と少ない。

No.1とNo.4では、岩石鉱物組成において安山岩が46.1～67%と卓越することで特徴づけられる。安山岩のほか、斜長石・重鉱物・変質火山岩類などを少量伴うが、石英・カリ長石・花崗岩類などは他の3試料よりきわめて少ない。重鉱物量は他の3試料よりわずかに多い傾向がある。

第2表 繩文土器試料の岩石鉱物（数字はポイント数、+は計数以外の検出）

	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12	No. 13	No. 14	No. 15	No. 16	No. 17	No. 18	No. 19	No. 20	
石英 - 單結晶	16	55	21	4	43	57	25	161	64	8	5	21	15	16	7	9	103	5	15	22	
石英 - 多結晶	4	2	3	1	12	6	12	7	2	3	3	2	5	8	1	3	2	15	1	2	5
カリ長石	2	10	4	8	10	34	21	2	5	3	1	3	1	3	1	3	27	5	7	7	
斜長石	22	50	25	49	77	118	54	148	79	50	70	55	74	44	47	33	91	69	140	65	
黑雲母	2	3	2	3	1	49	10	1								1	13				
角閃石	4	8	6	2	5	7	2	19	3	1	7	20	6	4	17	3	13	1	9		
榍石 - 内石																	3	3		+	
单斜輝石	15	5	6	35	3	2	3	7	26	26	69	29	26	38	20	4	23	25	16		
斜方輝石	8	1	7	12	6	7	10	1	3	11	9	57	11	10	37	11	11	14	13		
カルナバント石	1		+			1		1	2						3	19	6	4	2	6	
絆離石		1						1													
滑石					1																
シリコン		+																			
サクロ石			1																		
電気石			+																		
スフェーン	1																				
不透明鉱物	11	6	11	10	3	1	4	4	7	7	9	17	14	14	19	8	2	14	11	6	
玄武岩																	3	21	2	1	
安山岩	265	22	78	235	57	25	11	2	40	381	220	138	169	213	340	150	20	260	163	285	
ディヤイト	4	4	11	1	71	1	1					31	5	18			1	24	1	39	8
安鐵火山岩	25	14	23	7	3	14	38	4	9	22	35	11	5	8	4	7	7	35	19		
花崗岩類	3	26	12	34	78	76	200	34	2	7	14	1	3	1	6	15	3	3	3	7	
ホルンフェルス	4	1	31	6	67	22	27									1	1	2			
葉成岩類	1	1	3					2	4									1	5		
砂岩	6	12	3	5	49	15												1	9	2	
泥岩	7	32	51	14	24	4	36	11	19	6	1	8			1	6	42	4	5	10	
珪質岩	3	10	8	1	2	5				2	2	1	2		1		2	3	4	1	
致密變岩																					
火山ガラス - 無色	7	6	3	22	10	1			2		1	1	1			2	5	2	34		
変質鉱物	5	18	1	1	2	2	1	3	3	1	3	2	1	1	3	2	1	2	1	2	
その性	3	7	1	17		38	2	5	2	3	2	3	5	5	6	5	1	1			
赤褐色粘子	18	15	26	5	4	9	21	13	12	19	13	86	19	57	12	18	59	22	153	3	
マトリックス	1587	1712	1624	1675	1563	1539	1322	1639	1460	1566	1454	1621	1596	1425	1712	1480	1547	1378	1481		
合計	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000	2000		
直面割合	40	23	34	59	20	22	21	65	31	55	52	164	60	57	133	49	19	67	53	50	

重鉱物組成では、単斜輝石・斜方輝石・不透明鉱物が多く、角閃石・カンラン石・スフェーンなどをわずかに伴うが、黒雲母は計数されない。

No. 2・No. 3・No. 5は、岩石鉱物組成において、安山岩の産出のほか、花崗岩類をはじめ石英・カリ長石・斜長石が多く検出される。さらに泥岩・砂岩・珪質岩などの堆積岩も多く、変成岩類も伴いNo. 3では10%を占める。重鉱物量は6~10%である。重鉱物組成では、黒雲母が10%程度検出され、単斜輝石・斜方輝石・不透明鉱物のほかに角閃石が18~35%と多産することで特徴づけられる。No. 2では緑簾石・ジルコン・電気石が、No. 5では褐簾石が検出された。

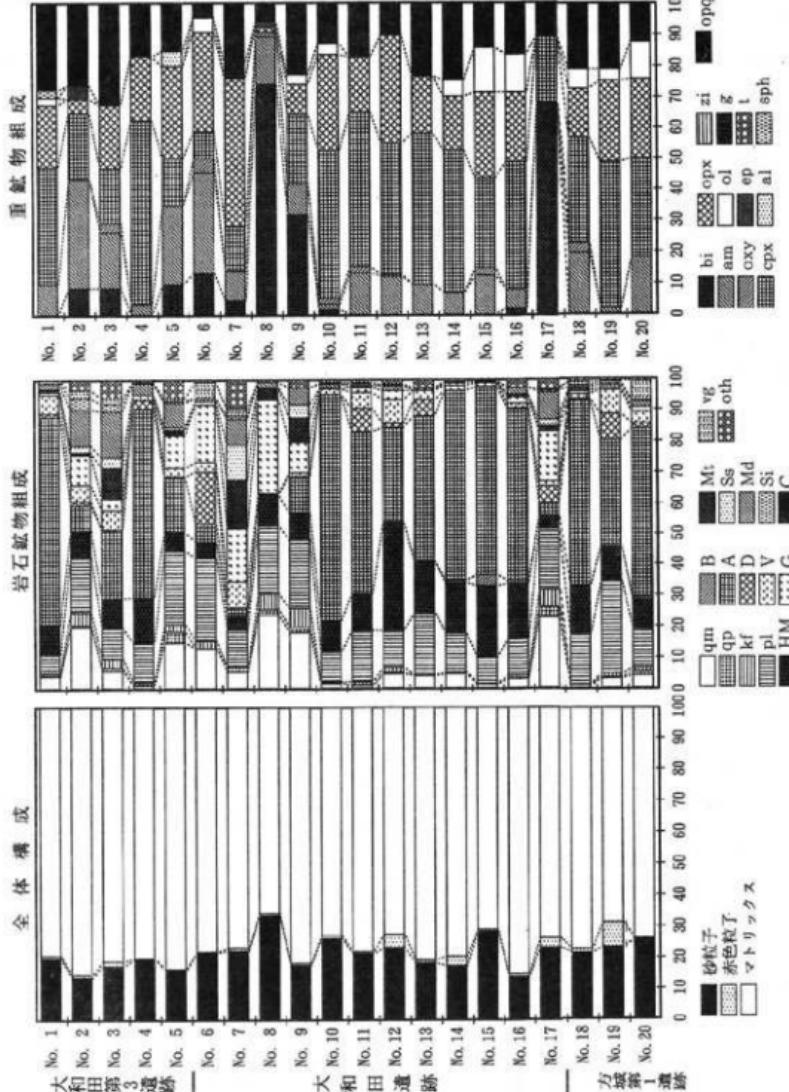
(2)大和田遺跡 全体構成における砂粒子の含有は、約20%前後の試料が多く、No. 16は14%の最低値を、No. 8は33%の最大値を示す。またNo. 15でも28%と砂粒子が多く含まれている。赤色粒子はNo. 12で4%、No. 14とNo. 17で3%、その他の試料では1%と少ない。

岩石鉱物組成および重鉱物組成の特徴から大きく2分される。Nos. 10~16は岩石鉱物組成において安山岩が30~73%と卓越することで特徴づけられる。斜長石は8~21%、重鉱物量は11~36%と多い。また玄武岩・変質火山岩類・ディサイト・石英などをわずかに伴う。重鉱物組成では単斜輝石・斜方輝石・不透明鉱物が多く、とりわけ単斜輝石は約30~50%を占める。また角閃石は10%前後の値で、カンラン石はNo. 15の14%を最大にNo. 10およびNos. 14~16で少量検出される。黒雲母はNo. 10とNo. 16とで微量検出されるにすぎない。

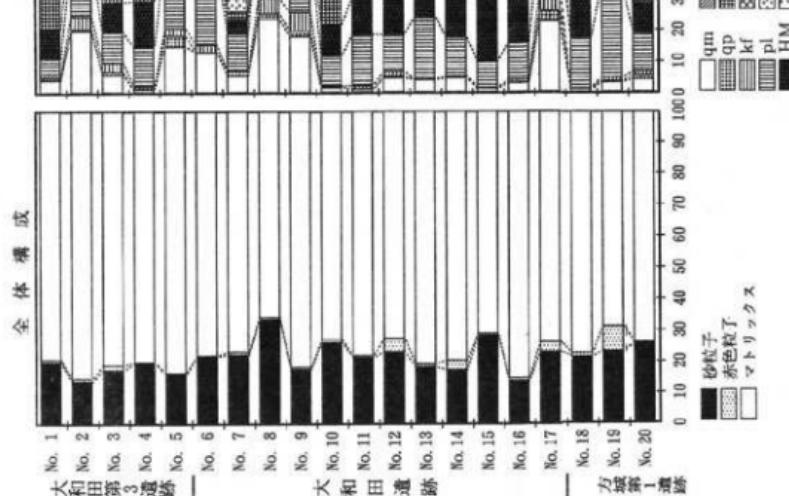
Nos. 6~9およびNo. 17は、花崗岩類・石英・長石類の多産で特徴づけられる。花崗岩類は10~30%、石英は7~26%、斜長石は12~28%、カリ長石は数%の産出を示す。安山岩は1%未満~数%、最大でもNo. 9の11%である。重鉱物量は4~10%とやや少ない。ディサイトはNo. 6で17%、No. 17で5%を占めるが他ではほとんど見られない。変成岩類はほとんどがホルンフェルスであり、No. 7で16%と多いが、他は数%以下であり、No. 6では検出されない。Nos. 7・9・17では砂岩・泥岩など堆積岩が数%検出される。No. 7では変質火山岩類が9%の産出を示す。その他No. 6で火山ガラスが数%含有される。重鉱物組成は、すべての試料で黒雲母の検出がなされる点で前述のNos. 10~16とは異なる。No. 8とNo. 17はともに約70%の黒雲母を含有するが、No. 8では角閃石・不透明鉱物がこれに続くのに対し、No. 17では単斜輝石・不透明鉱物が続く。Nos. 6・7・9は黒雲母が数%から約30%であり、斜方輝石・単斜輝石・角閃石・不透明鉱物などから構成される。その他カンラン石・酸化角閃石・ザクロ石などが微量検出される。

(3)方城第1遺跡 全体構成での砂粒子の含有は、22~26%であり、赤色粒子の含有はNo. 19が8%と多いが、他の2試料は1%と少ない。岩石鉱物組成では安山岩が35~60%と卓越し、斜長石12~30%、重鉱物10~16%と続く。その他石英・ディサイト・変質火山岩類・火山ガラスなどがわずかに含まれる。カリ長石・花崗岩類はきわめて少ない。重鉱物組成は、単斜輝石・斜方輝石・不透明鉱物・角閃石・カンラン石から構成され、3試料とも類似性が高い。

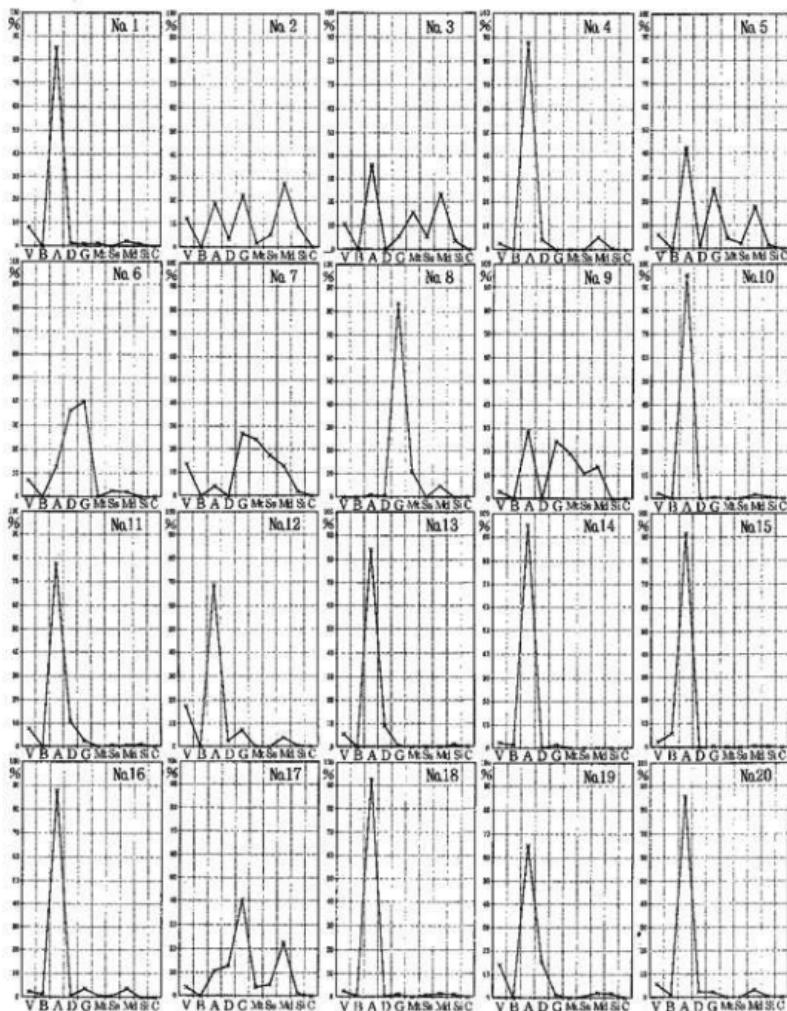
5. 岩石組成から見た土器の分類 岩石粒子は地城的特徴を示すと考えられる。そこで変質火山岩類・玄武岩・安山岩・ディサイト・花崗岩類・変成岩類(含ホルンフェルス)・砂

重鉱物組成
(基數)

岩石鉱物組成



第2図 織文土器の岩石鉱物組成
 qm 石英無粒晶 qp 石英多結晶 kf カリ長石 Ss 麻岩 Mt 鉄鉱石 Bt 安山岩 Hm 鹿島岩
 Gf 花崗岩類 Mt 麦成岩類 (含モルダバイト) Ss 麻岩 Mc 麻岩 St 鹿島岩
 bi 黒雲母 am 阿拉石 oxy 氧化輝石 cpx 卵形輝石 ep 鈍斜長石 al 鋸葉石 sph リチコブ
 g ダクロ石 t 透氣石 s フェーン opq 不透明物



第3図 岩石折れ線グラフ

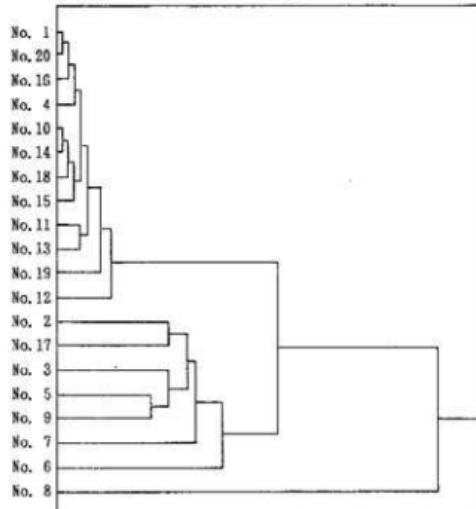
V変質火山岩類 B玄武岩 A安山岩 Dディサイト G花崗岩類 M変成岩類(含むホルンフェルス) Ss砂岩 Md泥岩
Si珪質岩 C炭酸塩岩

岩・泥岩・珪質岩・炭酸塩岩のポイント数の総数を基準とし、それぞれの岩石の構成比を折れ線グラフに示した(第3図)。折れ線グラフの類似性は土器胎土の類似性を示していると考えられる。折れ線グラフの類似性から分析した上記は以下のように便宜的に分類される。

- I群 安山岩の顕著な第1ピーク Nos. 1, 4, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 18, 19, 20
- II群 安山岩の低い第1ピーク (IIa) 花崗岩類の第2ピーク、泥岩の第3ピーク Nos. 5, 9
(IIb) 泥岩の第2ピーク、変成岩類の第3ピーク No. 3
- III群 泥岩の低い第1ピーク、花崗岩類の第2ピーク、安山岩の第3ピーク No. 2
- IV群 花崗岩類の第1ピーク、(IVa) 第1ピークの卓越 No. 8
(IVb) 泥岩の第2ピーク、No. 17
(IVc) デイサイトの第2ピーク No. 6
(IVd) 変成岩類の第2ピーク、砂岩の第3ピーク No. 7

以上の分類は、前述の岩石鉱物組成のうち岩石のみを取り出してそれを基準にして行なっているため、石英・長石・重鉱物などの造岩鉱物量を考慮していない。しかし、今回の実際の組成を見ると花崗岩類の多い試料では造岩鉱物である石英・長石・黒雲母・角閃石などが多く含まれ、また安山岩の多い試料では同様に斜長石・單斜輝石・斜方輝石・カンラン石などが含有されている。したがってこれらの分類は土器胎土の岩石鉱物組成をある程度まで代表していると考えられる。ただしII~IV群の区分は細かすぎるかもしれない。

6. クラスター分析による土器の分類 前項で折れ線グラフに用いた10岩石種のデータを用いてクラスター分析を行ない試料間の類似性を検討したい。クラスター分析における非類似度は



クラスター融合のプロセス

1	: No. 10 - No. 14	4.8800
2	: No. 10 - No. 18	9.4200
3	: No. 1 - No. 20	11.3500
4	: No. 1 - No. 16	22.3200
5	: No. 1 - No. 4	26.9800
6	: No. 10 - No. 15	32.5300
7	: No. 1 - No. 10	35.5100
8	: No. 11 - No. 13	56.8700
9	: No. 1 - No. 11	58.7100
10	: No. 1 - No. 19	216.8800
11	: No. 1 - No. 12	234.4300
12	: No. 5 - No. 9	507.5600
13	: No. 3 - No. 5	619.6000
14	: No. 2 - No. 17	630.7200
15	: No. 2 - No. 3	755.1000
16	: No. 2 - No. 7	806.0500
17	: No. 2 - No. 6	993.9000
18	: No. 1 - No. 2	1384.6200
19	: No. 1 - No. 8	2516.9400

第4図 樹形図

ユークリッドの平均距離を用い、最短距離法によって算出した（注1）（第4図）。

I群中の試料はそれぞれ類似性がきわめて高く、一つのクラスターをなしている。II～IV群の試料は類似性がI群ほど高くはないことがわかる。しかしII群内の試料もまとまったクラスターを形成している。このようにクラスター分析によって前項で行なった岩石折れ線グラフによる分類が図示されたことになり、分類の妥当性が示された。

7. 土器の産地推定 上器の産地は、胎土の持つ物質的特性を手がかりとして推定される。物質的特性の多くは周辺の地質に起因していると考えられる。ここでは河川砂の岩石組成との比較によって土器産地の推定を試みる。河川砂のデータとして八ヶ岳南麓周辺地域（河西ほか、1989）および甲府盆地（河西、1989）のものを使用する。前述と同様のクラスター分析の樹形図を第5図に示す。第4図でI群と分類した試料は全て八ヶ岳南麓を流れる小河川の砂と同一のクラスターに属している。しかしNos. 11・13・19などの試料では岩石鉱物組成で数%デイサイトが含有されている。八ヶ岳南麓河川ではデイサイトがあってもきわめて微量である。八ヶ岳南麓東縁を流れる須玉川の箕輪付近では並崎岩屑流の下位に黒富士火碎流が露出することからデイサイトが多く検出される。八ヶ岳火山もデイサイト～流紋岩質の噴出物をまれに噴出していることからまったく八ヶ岳山麓にデイサイトが存在しないわけではないが、胎土中のデイサイトとの関係は不明であり、今後の調査が必要とされる。これらの問題はあるが安山岩を中心とした両輝石とカンラン石・角閃石からなる重鉱物組成をもつI群土器は、八ヶ岳山麓全体および若干その周辺地域を含めた範囲において在地的な性格がきわめて強いといえる。おそらく八ヶ岳山麓の原料を用いて製作された土器である可能性が高い。

No. 2は釜無川の河川砂と類似性が高い。特に信玄橋・小武川・上教来石付近などの釜無川上流地域の岩石鉱物組成と類似している。重鉱物組成ではこれらのうち上教来石のそれに近い。河川砂試料が十分ではないので限定はできないが、花崗岩類と堆積岩および安山岩で特徴づけられる地域、たとえば釜無川上流地域などで製作された可能性がある搬入土器と考えられる。

No. 17は第5図で釜無川河川砂と類似していることが示されている。しかしNo. 2ほど釜無川の組成との類似性が高いわけではない。花崗岩類を主体とし堆積岩・デイサイト・安山岩を伴うことから、釜無川ばかりではなく塩川・荒川流域でも類似した組成が得られる可能性が考えられる。大和田遺跡にとっては搬入土器と考えられる。

No. 8は笛吹川河川砂のクラスター中に含まれている。花崗岩類が卓越しホルンフェルスを伴い、重鉱物では黒雲母・角閃石が多く、安山岩・デイサイト・両輝石などをほとんど含まないことから、花崗岩類地域で原料が採取された可能性が強い。河川砂組成だけからすると甲府盆地東部の笛吹川流域と類似性が高いが、遺跡周辺にも甲府岩体や甲斐駒岩体が広く分布しており、これら花崗岩類の風化堆積物ではNo. 8と類似性の高い組成が推定される。本試料は花崗岩類地域で製作された搬入土器と考えられる。

Nos. 3・5・9は、釜無川のクラスターと笛吹川のクラスターが融合したものにさらに融合

している。花崗岩類のほか安山岩・堆積岩・変成岩類などを多く含み、重鉱物では黒雲母・角閃石と霞輝石が検出されるなど何種類もの岩石が混合していることで特徴づけられる。安山岩を多く含むことおよび霞輝石も割合が多いことなどから釜無川と笛吹川とではより前者の組成に類似性が高いと考えられる。

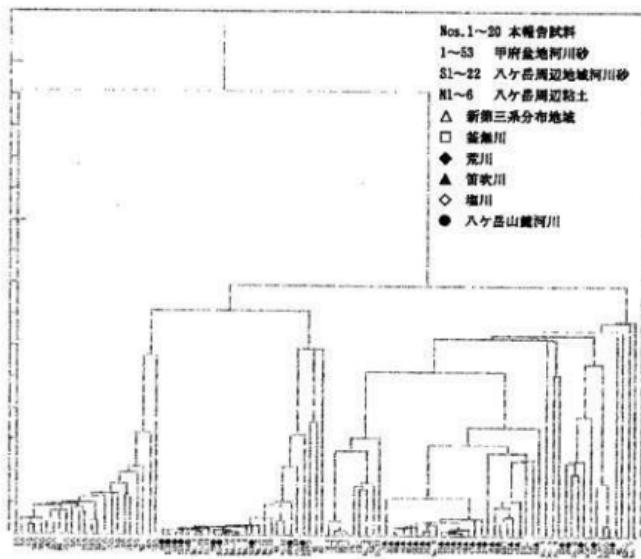
No.6は、荒川地域の組成のうち甲府盆地のJ型（河西、1989）とした河川砂組成に類似性が高い。花崗岩類とデイサイトの多産で特徴づけられることから、甲府岩体と黒富士火砕流堆積物とを後背地に持つ荒川流域から塩川流域にかけての地域で作製された可能性が高い。

No.7は、釜無川・笛吹川・塩川・荒川などいくつかのクラスターと最後に融合しており、これら河川堆積物との類似性の低さを示している。花崗岩類・ホルンフェルス・砂岩・泥岩が多い組成は、小武川の砂と似ているが、重鉱物組成で異なる。花崗岩類の一部は変成を受けている。ホルンフェルスは片理状組織が見られるものがあり、砂岩の多くは変成作用を受けて白雲母・黒雲母が生じている。山梨県下でも堆積岩に接触変成作用を与えていた花崗岩類分布地域ではこのような組成を示す河川堆積物が存在するかもしれないが、これまで分析した河川砂中には見られないことから地域の限定はできない。No.7は、大和田遺跡報告書において唐草文系の搬入土器とされている（伊藤、1989）。唐草文系土器は、諏訪盆地・伊那谷など天竜川流域を中心として松本平にも分布する土器とされている（米田、1980）。天竜川流域には領家花崗岩や領家変成帶が広く分布することから、本組成と同様の堆積物の存在する可能性が高い。今後長野県地域の河川砂のデータを蓄積してこの産地の問題を解決させたい。ただし本遺跡にとってNo.7が搬入土器であることは明らかである。

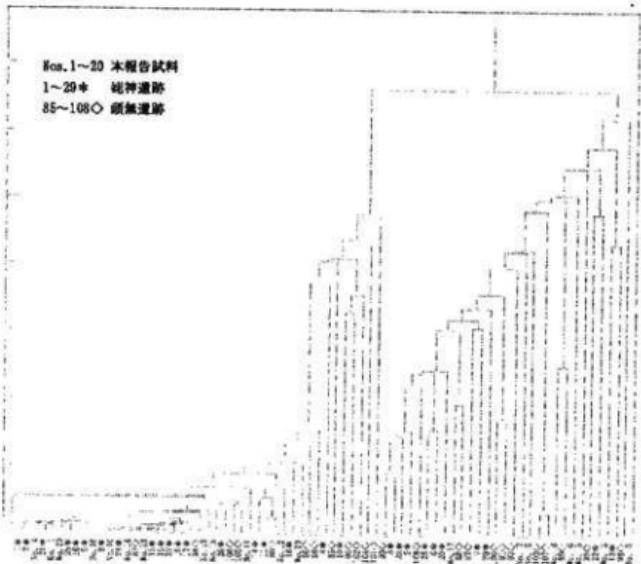
8. 姥神・頭無遺跡との比較 すでに分析されている姥神・頭無遺跡と今回の分析結果を合わせ同様のクラスター分析を行なった（第6図）。本図ではクラスターが大きく2分される。一方はI群とした試料がすべて含まれるクラスター、他方はII～IV群とした試料が含まれるクラスターである。これは第5図の結果から前者を在地性土器、後者を搬入土器とも解釈される。搬入土器の産地の多くがデイサイトや花崗岩類の分布地域と推定されている。これらの岩石が八ヶ岳の隣接地域に分布していることから土器移動距離を極端に大きく考える必要はない。

同一遺跡出土の曾利式や加曾利E式などで同一型式内の土器においてもI群のクラスターに含まれるものとII～IV群に含まれるものとに別れる。これに対しサンプル数は少ないが姥神・頭無遺跡出土の曾利繩文系土器、および大和田遺跡出土の唐草文系土器は全てII～IV群に含まれる。従って、曾利式・加曾利E式のあるものは八ヶ岳山麓で生産され、また曾利式・加曾利E式のあるものや曾利繩文系・唐草文系は他地域で生産されていたことがわかる。

一遺跡においてのI群クラスターに含まれる土器とII～IV群クラスターの上器の割合は、姥神・頭無・大和田遺跡でおよそ6：4と一定している。これに対しサンプル数の少ない大和田第3遺跡では4：6と逆転し、方城第1遺跡ではすべてI群クラスターに含まれている。I群クラスター上器は八ヶ岳山麓地域から見ると在地性だが、それぞれの遺跡にとって搬入土器か



第5図 河川との比較



第6図 姥神・頭無遺跡との比較

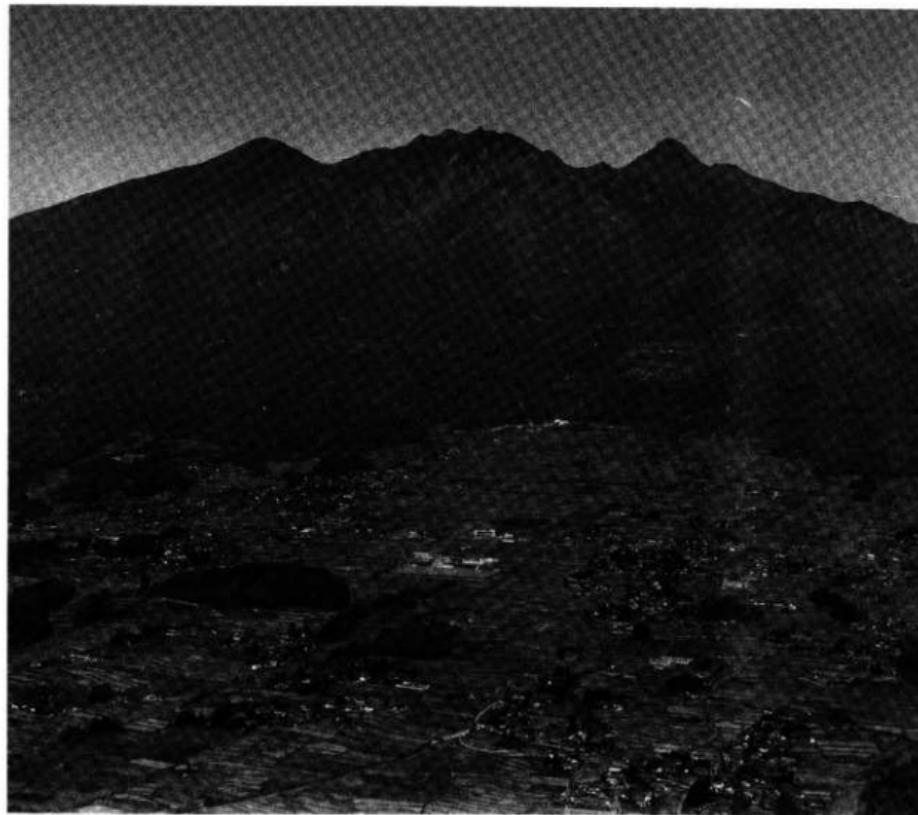
在地性かはわからない。しかし姥神・頭無・大和田遺跡で八ヶ岳山麓以外に産地が推定される土器が約40%を占めていることから、八ヶ岳山麓地域内の移動がまったくなかったとは考え難い。したがって各遺跡ごとの在地性土器はより少なく見積もられることになる。これら3遺跡がほぼ同じ比率で八ヶ岳山麓以外の地域からの搬入土器を所有するということは、当時の八ヶ岳山麓地域に分布する遺跡のもつ背景の類似性を暗示しているものと考えられる。サンプル数の少ない大和田第3遺跡・方城第1遺跡の性格については、ここで早急な結論を出さず今後の課題としたい。

注1 計算にはNECのコンピュータPC-9801および「パソコン統計解析ハンドブックⅡ多変量解析編」(共立出版)所収のプログラム“CLUST”を用いた。

文 献

- 伊藤公明 1989 『大和田遺跡・大和田第2遺跡』 大泉村教育委員会。
- 河西 学 1989 甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成 上器胎土分析のための基礎データー 山梨県考古学論集II 505-523。
- 河西 学・櫛原功・大村昭三 1989 八ヶ岳地域とその周辺地域における縄文時代中期末土器群の胎土分析 山梨文化財研究所研究報告1 1~61。
- 河内晋平 1977 八ヶ岳地域の地質 地域地質研究報告(5万分の1図幅) 地質調査所 92p.
- 米田明訓 1980 南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年—所謂「唐草文土器」を中心にして 甲斐考古 17・1 365-411

図 版



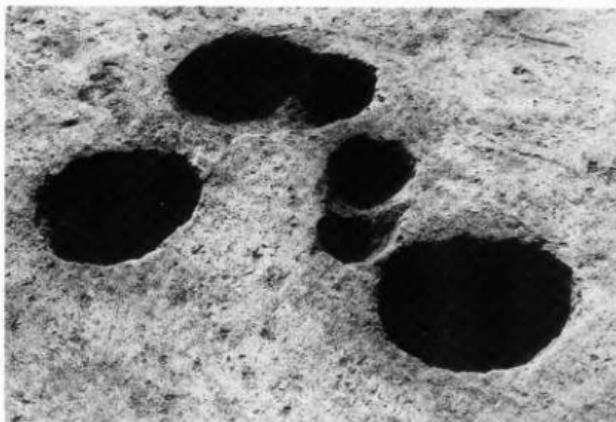
遺跡遠景

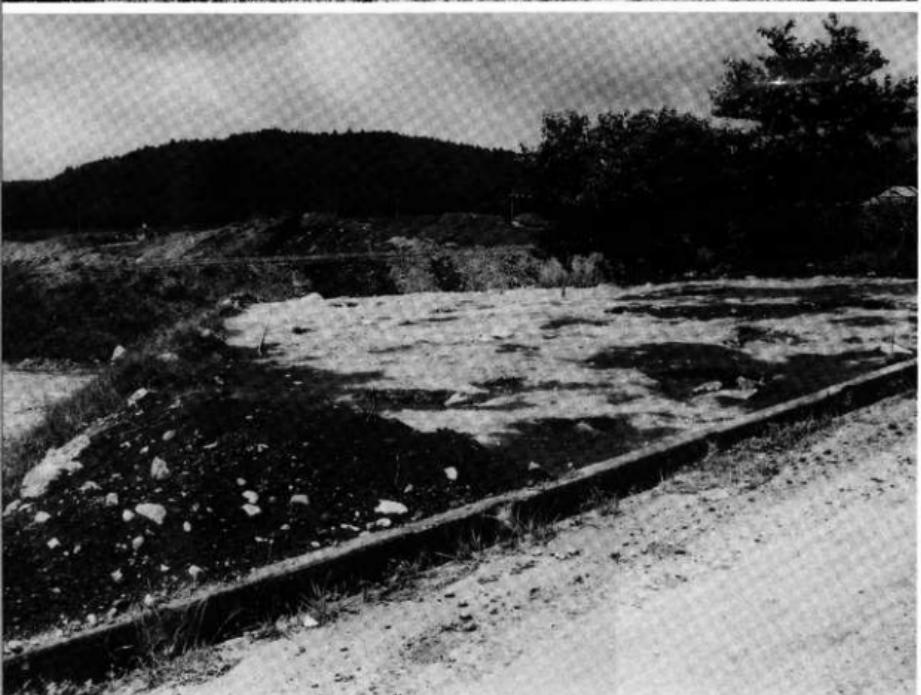


上 遺跡からの眺望
下 "

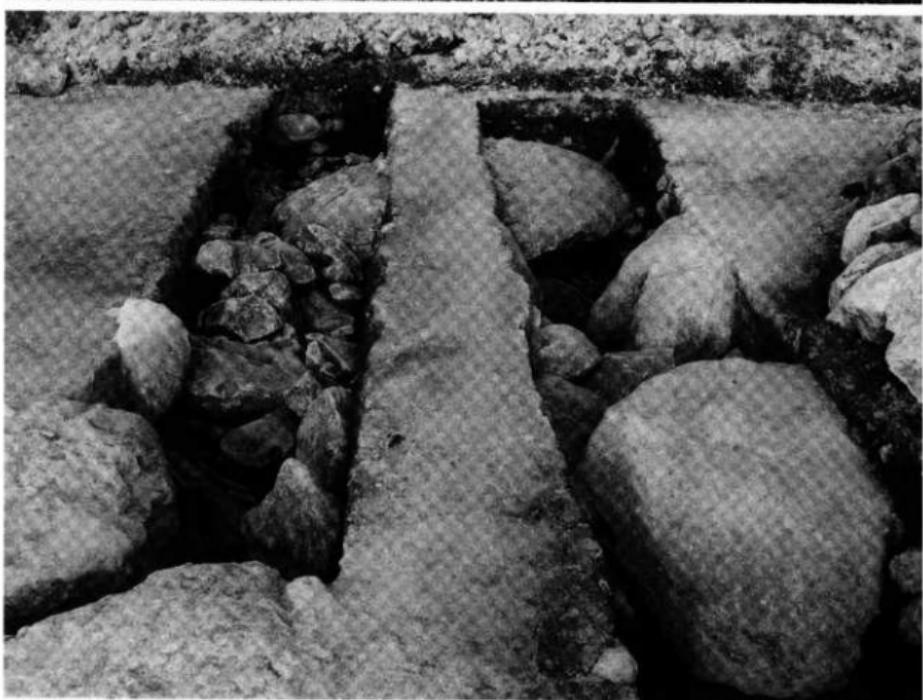


上 A・B-2・3区小土壤群
中 同部分
下 風倒木痕





上・下 遺構確認面



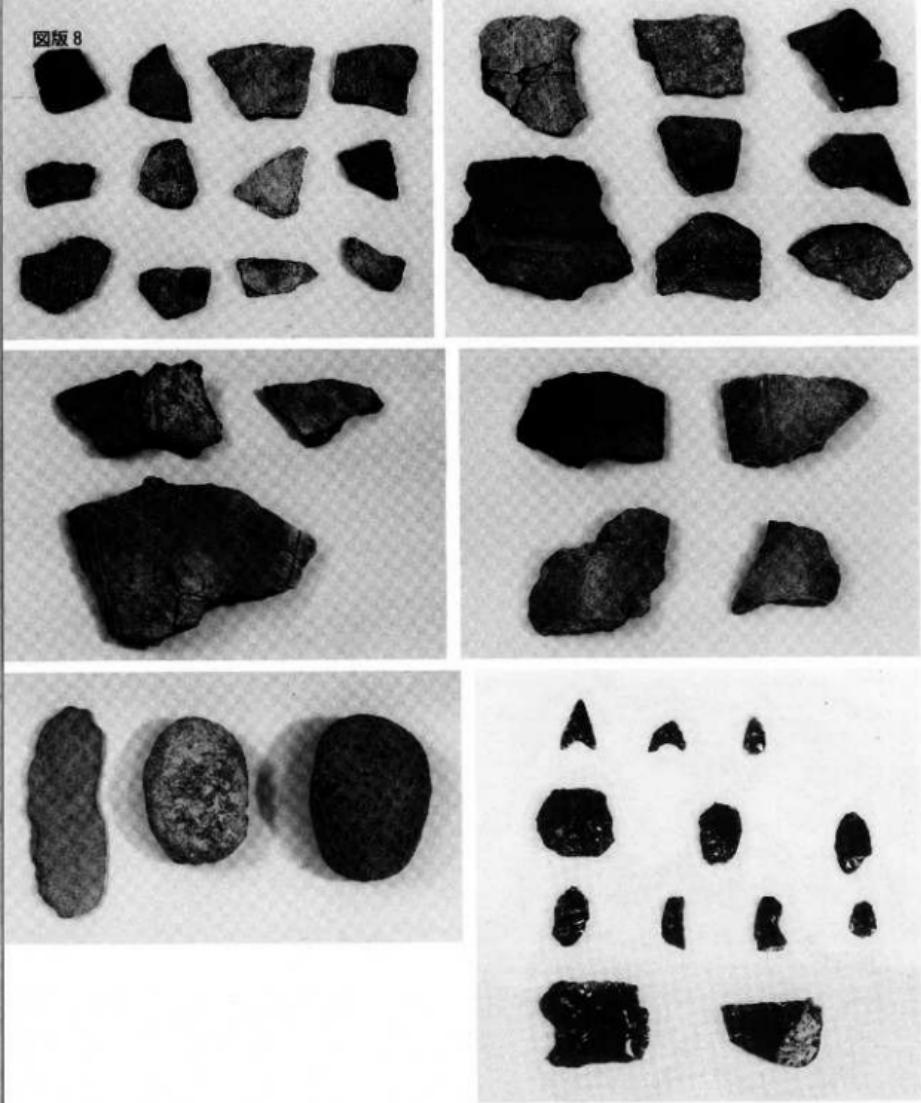
上 1号トレンチ
下 2・B・Dトレンチ（部分）



上 3A・Bトレンチ
下 4A・B・C・Dトレンチ



上 作業風景
下 遺跡現況



出土遺物

大泉村埋蔵文化財調査報告書 8集

発行 平成2年3月31日発行

編集 大泉村教育委員会

〒409-15
山梨県北巨摩郡大泉村谷戸3025
TEL 0551-38-3115

印刷 メモリヤ印刷

甲府市丸の内一丁目14-6
TEL 0552-35-4311

